

対象	中学校 3 学年以上
教科	国語科
該当 単元	中学 3 年 言葉 2 「慣用句・ ことわざ・ 故事成語」
教科書	光村図書等
掲載日	2017. 10. 14. 朝刊 12 版 28 面 ～こころの好縁会の記事～ 玄侑宗久さんの基調講演から

僧侶・作家

玄侑宗久さん

こころの好縁会

相手がいてこそ  
幸福感得られる

鈴木先生がおっしゃる「幸せ」といふ言葉は、「神が祝福して下さる」という意味です。私は、どうやったら幸せになれるかということを探りながら生きてまいりたいと思います。

日本人は「しあわせ」という表現をずっと使ってきました。そこに「幸福」という文字を当てはめたのは、明治の初めのこと。奈良時代は「為合」と書いて「しあわせ」でした。当時、「那為」と書いて天変地異のことを言っていました。運命として受け入れていくしかないという意味で「為」を当て、「為合」と書いたのです。

それが室町時代になると「仕合」と書くようになり、この言葉は同時に「しあいい」とも読みました。主語が「天」ではなく、「人」になる。あの人がこう来たんだから、自分はどう仕合わせられるか。うまく受け身をするのが「仕合」という言葉でした。最近では目標を立てることが素晴らしいと思われがちですが、元々の日本人の幸福感はいくまで「仕合わせ」ですか。相手の出方が先にあるんですね。

日本人が好むことわざは反対の言葉に満ちています。「善は急げ」に対して「急がば回れ」。「うそつきは泥棒の始まり」と「うそも方便」、「立つ鳥跡を濁さず」と「旅の恥はかき捨て」、「二兎を追う者は一兎をも得ず」と



「一石二鳥」。一本化せず、わざわざ逆の考えを膨らませてきました。「しあわせる力」というのは、相手の出方にどう対応できるかという対応力のこと。それでお互いが上機嫌になります。対応するためには両端を知っていて、中間のどこにでも着地できるといふところが一番いい。そういうあり方を進めてきたのが、日本という国じゃないかと思っ

基調講演  
玄侑さん

# 幸せ どう紡ぐ

問1：日本人が使ってきた「しあわせ」という表現は時代によって使われた漢字が違  
うと玄侑さんは話されました。時代ごとに確認してみましょう。

奈良時代[ ] 室町時代[ ] 明治時代以降[ ]

問2：玄侑さんは明治以前の日本人の幸福感はどういうものだと言ってみえますか。  
あくまで[ ]であるから、[ ]が先にある

問3：玄侑さんは「しあわせる力」とはどんな力だと言ってみえますか。  
[ ]

発展：「日本人が好むことわざは反対の言葉に満ちている」例として挙げられたこと  
わざを書き出しましょう。できれば自分でも一つ考えてみましょう。

	↔	
	↔	
	↔	
	↔	
	↔	

## 【活用にあたって】

「ことわざ」とは古くから世間で言いならわされてきた生活上の知恵や教訓が込められた言葉です。それについて理解を深めることが単元のねらいだと考え、発展問題がメインとなるでしょう。それでも玄侑さんが講演された「しあわせ」という言葉の変遷は、「ことわざ」の学習を深めるには大いに役立つと考え、発問は記事を読み進めながら取り組めるように設定しました。

「ことわざ」は適切に使うことで表現の幅が広がりますが最近では誤用も目立つようです。自分の表現したいことに誤解を招かないためにも、こうした記事にふれた際に正しく使えているかを確認するとよいと思います。

### 解答例

問1：奈良時代[為合]室町時代[仕合]明治時代以降[幸福]

問2：あくまで[仕合わせる]であるから[相手の出方]が先にある

問3：相手の出方にどう対応できるかという対応力

発展：善は急げ ←→ 急がば回れ

うそつきは泥棒の始まり ←→ うそも方便

立つ鳥跡を濁さず ←→ 旅の恥はかき捨て

二兎を追う者は一兎をも得ず ←→ 一石二鳥

例：好きこそものの上手なれ ←→ 下手の横好き